
ミオン

† アラクネ †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミオン

【Nコード】

N7118B

【作者名】

十アラクネ十

【あらすじ】

仕事からの帰り道。春の盛りの公園の中で、私は舞い散る花弁のように、儚くも命を奪われてしまう。愛おしいあの子は、今日も私の死を理解出来ずに、ひたすら帰りを待ち続けている。

土花びら1枚

バイトを終えて、いつも通りの帰り道。

穏やかな春の夕陽に照らされながら角を曲がると、桜の木に囲まれた小さな公園が見えてくる。

春真つ盛りの今、薄桃色の綿飴のような花の美しさは圧巻の一言。

優しく零れる花弁に目を細めながら歩いて行くと、一本の桜の木の枝にちょこんと座る、すらりとした黒猫の姿が目に入った。

「ただいまあ」

私は友人にするように、片手を上げてゆっくりと振ってみせた。

太い幹の上でニャアと鳴いた黒猫の名は、ミオン。

私が付けた名だ。この公園に捨てられていた彼女を見付け、拾って連れ帰ったのはもう、二年も前のこと。

ミオンはとても賢い猫で、私が駅から家までのショートカットとして公園を横切ることを知るや、毎夕こうして出迎えてくれるようになった。

お気に入りらしい、特別大きな桜の、一番下の枝に座って。

今や日課となっている愛猫のお出迎え。毎日のことなのに、やはり今日も新鮮な嬉しさに胸が踊る。

「ミオン」

黒猫の名を呼んで小走りになりかけた時、後ろから人の足音が聞こえた。

気にすることなくミオンの所に急ごうとすると、背後の人物が急に走り出した気配がした。

どん。

それは、振り返りかけたのと、ほぼ同時。

いきなり熱湯を浴びせられたかのような熱が背中に広がり、強烈に弾けた。

「……っ！」

声を出す間もない。

私は意思に反して前のめりによるめき、次の瞬間、二度目の熱が背中の別の部分で炸裂した。

それはあまりに強すぎる為に熱としか感じられない、痛みの感覚だったのだけれど。

私は地面に顔から突っ伏し、鼻孔一杯に広がる土の匂いを嗅いだ。俯せになった私を、容赦なく押さえ付ける重い感触。

荒い息遣いが耳に触り、肩、背、腰と続け様に振り下ろされる、凄まじい衝撃。

ミオンが、叫ぶような声で鳴くのを見聞きした。

ショックで霞んだ視界の先に、こちらに走って来るミオンの姿が映った。私は駄目だと制したいのだけれど、開いた口から溢れたのは、濁った音と大量の血液だけだった。

（ミオン…）

混乱と脱力の狭間で弱々しく呟いた時、フツと掻き消えるように背後の圧迫感が無くなった。ジャリツと乱暴に土を踏む音が聞こえた刹那、慌ただしく走り去る気配と音を辛うじて感じた。もう目も見えてはいなかったけど、その足音が向かったのが元来た公園の入口、ミオンとは逆方向だということだけは分かった。

（ああ、良かった）

深い安堵。

それが、私が生きていくうちに感じた、最後の感情となった。

土花びら2枚

平和だった街は、突然起きた事件に騒然となった。

警察やマスコミや野次馬が次々と公園に押し寄せ、私の理不尽な死をあれこれと詮索し、噂し、推測し合った。

けれどそれも、所詮は一時の気まぐれ。人は飽きる生き物だから。

半ば桜の花が散り切ってしまった頃には、公園はすっかり元の静けさを取り戻していた。

事件の情報を求める大きな立て看板と弔いの花だけが、あの事件が確かに起きた現実だということを物語っている。

私はピカピカの看板の前に佇み、何度もその文面を読み返してみ
る。

『四月十二日：夕方六時頃に…通り魔…殺人事件…』

そうか、私は通り魔に刺されて死んだのか。

間抜けな話だ。私は看板を読んで初めて、自分の死因を理解した
のだった。

早朝の朝もやに霞む静かな公園に、重なるように入ってくる二つの自転車の音が響いた。

振り返って見なくても分かる。私の母親と、中学生の妹の由香里。二人は自転車を止めると、テキパキと花を新しい物に代え、冷たい水に浸した雑巾で看板を磨きだした。

私が死んだあの日から、二人は毎朝この作業を欠かさない。

花はまだ萎れていないのに。看板は綺麗なままなのに。学校やパ
ートのある二人にとって、朝の一時間はとても貴重だろうに。

（ママ、由香里。もういいよ、もういいんだよ）

私の声は風に溶け、家族達には届かない。

やる瀬ない思いで桜を見上げると、そんな私を見下ろすつづらな瞳と視線が合う。

（あんたも早く帰りなさい、ミオン）

実の所、私がここから去れないでいる一番の原因は、このミオンなのだ。

私がいなくなってから、ミオンは一日の大半を、この桜の枝の上で過ごすようになっていた。

最初は母親や妹が無理に連れ帰っていたのだが、どうしてもまたここに戻ってきてしまう。

（ミオン、待ってたって私は帰れないんだよ）

視線が合ったと思った瞳は、私を素通りして地面に置かれた皿を見ている。

（ねえミオン、あんた私が死ぬの見た筈じゃない）

細い体をしならせて木から降りると、ミオンは母親達が置いていった食事を豪快に食べ始めた。

（ミオン……）

動物には霊が見えるなんて、誰が言ったのだろう？

私は可愛い飼い猫の背を撫でてやることも出来ずに、ただ切ない気持ちで空を見上げた。

鮮やかに澄んだ青色が、今の私の目には痛すぎる。

花びら3枚

肉体を持たない者にとって、時間の経過とはずいぶん希薄な存在なのらしい。

陽に溶け、風に揺られ、緑の匂いにまどろんでいる間に、気付くと平気で五日や十日が過ぎてしまう。

数日振りの目覚めの時、私は一番に桜の枝を見上げる。

そこには決まって、ミオンの凛々しい姿があった。

それを確認した時の気持ち、どう表現したらいいだろう？

ミオンが無事でいたことの安心。帰らぬ私を待ち続けていることの切なさ。その健気な愛情への感動。それに報いてやれない、悔しさ……

（ねえミオン、どうして、そんなに健気に待ってられるの？）

私の死を目の当たりにした、唯一の目撃者がミオンだというのに、ミオンは艶やかな体毛を舌で整え、軽く伸びをしてからまた、きちんと枝の上に座り直した。

あんなゴツゴツした木の枝の上なんて、さぞかし座り心地が悪いだろう。

（あんなに神経質で、居場所にこだわる子だったのに）

由香里が買ってきた高価な猫用ベッドより、母親お手製の不細工なクッションの方を好んだ、可愛い黒猫。

（あの時の由香里、すごい顔してたよねえ、ミオン）

ゆらゆらと過ぎる不安定な時の流れの中で、私は思い出という名の砂糖菓子、いくつもいくつも口に含んだ。

それはかつて、当たり前なこととして時間に埋没していた日常。

特別意識したこともない、ごく有り触れた毎日の生活。

その一つ一つがどれだけ尊く、掛け替えの無いものだったことか。

私は目を閉じ、親しかった者達のことを考える。

父や母や妹、友人達、バイト仲間、世話を焼いてくれた教師や上司。

皆、悲しんでくれた。涙を流して、絶対に犯人を捕まえてみせると、堅く誓ってくれさせた。

（それだけで、充分）

人間は強い。

悲しみや悔しさはそう簡単には消えないだろう。けれど、やがて必ず風化していく。

死んだ人間のことをいつまでも嘆いて沈んでいられるほど、人の生活は楽でも暇でもないものだ。

残された人々は私の死を理解し、たつぷりと悲しみの涙に溺れた後、必ず諦めて次に進む時期を迎える。

では、ミオンは？

私の死を理解していない黒猫。

理解していない故に、次に進む術を持たないミオン。

二度と戻らない主人を、いつまでも期待を抱いたまま待ち続ける。

ああ、と私は喘いだ。

体も持たないのに、熱い涙がとめどなく頬を濡らして止まらなかった。

（どうして、こんなことに……）

愛猫と過ごした日々、その思い出。

それらはどれも鮮やかな色彩に満ち溢れ、春の陽光のように暖かく輝いている。

拾われて来たばかりのミオンは本当に小さかった。固形物を与え

てもうまく食べられず、馴れない手つきでミルクを飲ませたことを、
今でもよく覚えている。

片手にすっぽり収まったまま小さな前足で掴まり、必死で哺乳瓶
の口をくわえる姿は、本当に可愛いくて、可愛いくて。

（もう待たなくていいよ。もういいんだよ。ミオン……）

切実な祈りは、それでも伝わることはないまま。

花びら4枚

桜。

咲き乱れる、桜の花。

ついこの前蕾が出始めたと思っていた桜は、少しうつらうつらしていた間に、すっかり満開になっていた。

私は相変わらずピカピカな看板と瑞々しく活けられた花を眺めてから、ふいと桜の木を見上げる。もう、すっかり習慣になった仕草だった。

見上げた先には当然のようにミオンがいて、いつものように凜とした姿で同じ方向を見据えている筈だった。

しかし。

(……ミオン?)

空っぽの、桜の枝。

私はぐるぐると辺りを見回し、愛猫の姿を探した。木の上を離れたとしても、必ずその近くにはいる筈。

(ミオン……?)

しかし、いない。

どこにも、気配すら無い。

(ミオン……)

私は戸惑い、予期せぬ状況にうろたえた。

確かに私は、ミオンが家に戻ってくれることを望んでいた。桜の上にミオンを見付け度、心を痛めたのも嘘ではない。

（ミオン、ミオン？）

しかしいざ姿が見えないとなるや、私は強烈な不安に胸を掻きむしられ、闇雲に公園内を探し回った。自分でも、意外な反応ではあった。

ミオンの姿を探し回ったのが、どれくらいの時間だったかは分からない。

キイツという聞き慣れた音に気付いて我に返ると、自転車から下りる由香里の姿が目に入った。

（もう、次の朝が来たってこと？）

時間の感覚の希薄さに改めて驚いていると、由香里は静かに桜の木の前に立った。

いつもと様子が違う。少し俯き加減の妹が、大切そうに手に持っている物。

（ミオンの、首輪？）

不吉な予感が背筋を走ったのとほぼ同時に、由香里が口を開いた。

「お姉ちゃん、ミイが、そっちに行ったよ」

（……え？）

「今、一緒にいるのかな？ ……だよね。やっと……だって……」
ボロボロと溢れ出す涙に、由香里は声を詰まらせた。

声を詰まらせながら、途切れ途切れに、とめどなく喋る。

「最近は何か、元気……無いなって、みんな、心配」

「痩せちゃって、お腹、ばっか目立つ……」

「……でもね、赤ちゃんは大丈夫」

「ミイ、頑張ったよ」

「……頑張ったけど」

「最後、の子、産んで……それで、……」

私は呆然としたまま、由香里の言葉を聞いていた。

足元が、バラバラに砕け、崩れていくような気がしていた。

私は、知らない。知らなかった。

全て初耳。ミオンが妊娠していたことも。出産に堪えきれないほど、体を弱らせていたことも。

「お姉ちゃん。最後の子はね、ミイそっくりの、可愛い、女の子なんだよ」

由香里は桜を見上げながら、そう言って無理な泣き笑いを浮かべた。

その顔は以前より少し痩せて、ずいぶん綺麗になっていた。そのことに、今、初めて気付いた。

世界はきちん時を刻み、少しずつ変化を重ねていつている。

時の止まってしまった私とは、違う。

ほんの少し居眠りしていただけたのつもりだった。私にとっては、その程度の朧な時間。

なのに、その一時に起きた出来事の、何と重たく深いことが。

私は痛いほど強く、思い知らされる。

自分が死者であるということを。この世界に属さない、異質な存在であるということを。

（……ミオンが、……死んだ）

その言葉をいくら唱えてみても、全く実感が沸いてこない。ただ、ぼんやりと想う。

(……なら、ミオンの魂はきつと、ここに迎えに来てくれる……)
今度は、私が待つ番なのだ。

私は待った。

美しい桜の花の煌めきに息を震わせ、意識して全身にこの世界の息吹を感じながら。

時の感覚が不安定な私には、その時間がどれくらいかは定かではない。

しかし少なくとも、桜が全て散り切る前には、その黒猫は姿を現した。

いつもの桜の枝の上。ゴツゴツした幹にいつものように腰を降ろし、明るい陽の光に滑らかな体毛を輝かせる、その姿。

凜とした整った顔、意思の強さを伝える眼差し。

(……ああ)

私は震える手で口を押さえ、ゆつくりと黒猫に近付いた。

伝えたいことがありすぎて、気持ちがまとまらない。感謝、愛情、切望、今まで溜め込んできたこれらの、一体どれから伝えたらいいのか。

(ミオン)

私は手を伸ばし、美しい黒猫を腕に抱こうとした。
しかし。

(え?)

スルリと。私の手はミオンの体をすり抜けてしまう。

(どうして? 同じ霊体のはずなのに)

気付くのに、大して時間はかからない。私はハッとして黒猫を凝視した。

(……小さい?)

立派な大人だったミオンと比べて、この黒猫はあまりにも体が小さいのだ。顔もそっくりではあるものの、比べて見れば全然幼い。ミオンと同じ行動に紛らわされ、最初は気付きもしなかったが。

(……まさか?)

閃いた考えは、そのまま答えとなる。

この黒猫は、死んだミオンが産み落とした、一番最後の子供なのだ。

花びら5枚

春の朗らかな陽気の中、私とミオンの話題が、ゆらりゆらりと人々の間に広まっていった。

そもそも例の通り魔事件以来、桜の上で主人を待つ猫の姿は、近所では前々から噂になっていたのらしい。

その健気な猫が死んだ後、まるで後を引き継ぐようにして、娘の子猫が同じ場所に座るようになったのだ。

美しくも悲しい話は、瞬く間に広まった。

近所の周辺でだけ囁かれていた話は、ネットを通じて遥か彼方にまでバラ撒かれた。涙を誘い、感動を呼び、言葉を変えて語られ人々の興味を集めた。

ある日ついに、どこからか噂を聞き付けたいらしい、テレビの取材が訪れた。

「関東××テレビの安齋です。今日は最近密かな話題になっている、忠犬…ならぬ、忠猫の取材にやってきましたあ！」

明るく若いレポーターの解説の中、私の死が改めて掘り返された。通り魔殺人の恐怖、理不尽な殺傷に対する怒り、飼い主とペットの間の愛情、信頼。それらを悪戯に煽るような形で進められる取材を、子猫は相変わらず桜の上から、興味無さそうに眺めている。

それでも、テレビの効果というのは絶大なもの。

その番組の放映以来、静かだった公園に再び世間の興味が引かれ、人が集まるようになった。

全く関係無い人達が桜の下に食べ物や花を置き、私の死を悼んだり、子猫を励ましてくれたりする。静かな時間に慣れ親しんだ私にとっては、奇妙以外の何物でもない。

（変なの）

今まで通りの日々を送りながら、私はぼんやりと考える。

（あの犯人も、あのテレビの放送を見てたりとか、したのかなあ…）

そんな騒然とした日々の中、満開の桜の花に包まれて、私の何度目かの命日が巡ってきた。

再びテレビの特集が組まれたらしく、マイクやカメラを持った人達が公園でセッティングを始めた。

野次馬も次々に集まってくる。

騒がしい。でも、決して不快な気分ではない。

私は子猫の側でまどろみながら、目を閉じて人々の足音に耳を傾ける。

カツカツカツ。　ジャリ、ジャリ、
ザク、ザク、ザク。

足音は人それぞれ。

よく聞くとすごく個性に溢れていて、一つとして同じものは無い。
ゆらゆらと人々のざわめきを楽しんでいた私は、ふいに。

ふいに、ある足音に意識を引かれて、思わず目を開いた。

それはごく普通のようにでありながら、奇妙に僅かな緊張を含んだ、独特の音だった。

重く、注意深く。

それでいて、鋭く突き刺す凶器のような

ザ、シュ。ザシュ…、ザ、シュ、ザ…ザシュ…

普通の人間なら気付きもしないだろう、ほんの些細な、小さな違和感。

ともすれば他の足音に混じって消えてしまいそうな、小さな、小さな、本当に小さな……

(……あ)

私の深い深い所で。

ずっと密やかに眠っていた感情が、突然、首をもたげるのを感じた。

喉から細い喘ぎが漏れ、實在もしない体からドツと汗が吹き出し、ゆらゆらと暖かかったまどろみに亀裂が走り……

私は。

確信して、息を飲む。

(この足音は)

それはほんの一瞬で刻み付けられた記憶。濃厚に深くにまで染みた、消えようのない、暗く重い記憶。

あっと思う余裕も無く。

私の中で、凄まじい勢いの黒い感情が沸き上がり、一気に膨れ上がる。

それは柔らかな殻を破ってドツと溢れ出し、一瞬にして私自身を

飲み込んでしまう。

感情の暴走。

それを止めようとする意識など、微塵ほども働かなかった。

なぜなら、聞き分けてしまった靴音が。

死の間際に聞いた、呪わしいあの殺人者の物に間違いないと、意識の一番奥で確信してしまったから。

±花びら6枚±

私は見た。

見てしまった。

自分を殺した、相手の姿を。

少し体格のいい、短い髪を少しだけ染めた、どこにでもいそうな男の顔を。

（こいつが、私から全てを奪った男）

沸き上がる、あまりにも強い、凄まじい怒りの感情。

（こいつ、が、殺した）

今までずっと気配すら潜めていた感情が、表に顔を出したと同時に、一気に開放されて弾ける。

（こいつが私を殺した！）

パンと破裂するように、まどろみが完全に消失する。

（こいつが殺した！ こいつが私を殺した！！）

私は両手で頭を押さえて激しくのけ反り、獣のように絶叫した。
止まらない。

一度開放された激情は熱を帯び、勢いを増し、私自身の魂を飲み込むような勢いで荒れ狂う。

（こいつが殺した！ こいつが奪った！ こいつが全ての悲しみを生んだ！！ こいつがこの男がこいつがこいつがこイツがああ！！）

悶える私の体に黒い炎が走り、一気に全身を包み込んだ。

熱さを感じない。

邪悪な炎すら、この弱い霊体に力を与え、復讐の刃と化す味方なのだと、私は錯覚する。

あああああああ！！

喉が裂けんばかりに絶叫する私を、黒い炎が蛇のように絡め取り、人だった頃の姿を歪めて空に向かって高々と、一気に。

怒りの暗黒に全ての視界を奪われそうになった、その、間際だった。

ミアア。

ふいに小さな鳴き声が、我を忘れた私の闇に、一筋の光を投げ入れた。

か細い、それはほんの一瞬のものだったけれど。

（…………ミオン？）

ハッとしたと同時に、塗り潰されかけていた視界が少しだけ開ける。

人でござった返す公園の桜の枝の上で、ミオンの娘である黒い子猫が、しなやかに身構えているのが見えた。

思えば、今までほとんど鳴き声らしい鳴き声を上げたことのない子だ。遊び盛りな年頃にも関わらず、母親そっくりの仕草で桜に座り続けた、ひどく大人しい幼猫。

その黒猫が、今、前足を力強く桜の枝に突き立て、艶やかな体をしならせて天に向けて、大きく口を開いた。

そして、咆哮。

真っ直ぐに天を仰いで、舞い散る桜の、花弁の元。

今まで誰も聞いたことの無いような不思議な鳴き声で、長く長く、いつまでも途切れない強い叫び。

あの小さな体のどこから、これだけの鳴き声が出せるというのか。公園内の誰もが、引き寄せられるように子猫を見上げた。

男も女も、遊びに集中していた小さな子供さえも。

息継ぎすることせず、澱み無く続けられる子猫の長い咆哮に、文字通り釘付けとなった。

±花びら7枚±

その時起きたこと。

それは、説明のしよつゝの無い、不思議な現象だった。

一人。

また一人と。

中心から緩やかに輪を広げていくように、誰もがその口をつぐみ、次々に男の姿に視線を向けていく。

まるで子猫の声が散らした花弁に、誘われでもしたかのように……

少し体格のいい、短い髪を少しだけ染めた、どこにでもいそうな男の姿に。

誰かが特別な発言をしたわけではない。
その男が妙な行動をしたわけでもない。
何の根拠も、そうなった理由も、一切、無い。
……けれど。

響き渡り続ける長い子猫の叫びの中で、その瞬間、そこにいた誰もが強制的な理解を強いられた。

「……人……殺し……」

誰かがポツリと呟いたが、それを咎める者も、驚く者もいなかった。

快晴の美しい空の下、暖かな陽光に無数の花卉が煌めく中、立つ
尽くす男の顔から一気に血の気が引いていく。

「あ……あうう……う……」

口を両手で押さえても、どうしようもなく漏れ出てしまう声。そ
れは、恐怖と、後悔と、絶望に満ちた哀れな呻き。

そこにいた誰もが、理屈の通用しない絶対的な力によって男の許
されざる罪を知ったのと同じように。

男もまた、逃れようのない大きな力によって自らの罪が暴かれ、
容赦なく陽の下に引きずり出されてしまったことを。

否応なく、『理解』したのだった。

私の体から、嘘のように黒い炎が消えていく。

限りが無いと思えた深い憎悪の感情すら、瞬く間に渴いてひび割
れ、バラバラに砕け散った。

（……ああ）

脱力して息を吐き、私は地面にへたり込んだ。

（……そうだ……）

私を死に致らしめた相手を目撃し、死に際を見取ってくれた唯一
の相手。

それが、ミオンだったというのに。

私はなぜ、ミオンが主人の死を理解していないなどと、思い込ん

でしまったのだろうか？

（ごめん。許して、ミオン……）

ミオンが自らの命を削り、子供に引き継いでまで成し遂げたかったこと。

それが、死んで帰らぬ私を待つことなどと、なぜ思い込んでしまったのだろうか。

桜の枝の上で、子猫がゆっくりと姿勢を正した。

大きな瞳が思案深そうに細められ、その目は確かに、陽に透けた霊体である私に向けられていた。

（あ……）

子猫が軽やかに木から飛び降り、音も無く走り出す。

地面に座り込んだ私に真っ直ぐに向かって来て、横を通る時、膝に頭を擦り付ける仕草をした。

懐かしく、温かい感触。

私は去って行く子猫の姿を目で追った。

滑らかなビロードのように輝く尻尾が門の向こうに見えなくなっても、膝の先に触れる柔らかな感触は消えない。

私は視線を落として、力一杯の笑みを浮かべた。

慣れ親しんだ感触、ぐるぐると喉を鳴らす音。

（待ってたよ）

愛おしさに震える腕でそっと抱き上げ、胸に寄せたその感触。薄く透き通った、美しい、ミオンの体からは。

甘い、桜の花の香りがした。

±桜満開±

犯人の自首という形で、私の事件は幕を閉じた。

《テレビにあの事件が取り上げられているのを見て、得意な気分になった》

……犯人が、公園で気を変えて自首しようと思った理由。

警察は首を傾げているし、あの日、公園にいた人達の中で口を開こうとする者も皆無だった。

（説明のしようがない、が正解かな）

私はふわふわと桜の木に触れ、その幹に軽くキスした。

それは撤退された看板の跡に植えられた幼木で、他の桜と比べたらまだまだ小さい。

だが、今年初めて、その枝に溢れんばかりの蕾を膨らませている。

（もうすぐ咲くね）

ミオンを抱いて、私は愛おしく微笑む。

腕の中のミオンは静かに寝息を立てている。正直、私も眠たくて仕方がない。

満開の桜に包まれた公園の中で、幸せそうな家族連れがはしゃいでいる。

小さな女の子を滑り台に乗せた女の人は、とても由香里に似ている。

女の子は嬉しそうに滑り台を楽しみ、砂場にいる猫達に向かって走る。戯れる猫の一匹は、ミオンに生き写しだ。

（変なお）

私は微笑む。

その家族連れの楽しそうな様子を見ると、なぜだか心が安らいで幸せな気分になる。

理由は分からないけれど。

（この桜が咲いたら、あっちに行こうか？）

ぼんやりと囁くと、眠っていたミオンが目を開いて私を見た。眠そうに、でもゆっくりと口を開いて、肯定の鳴き声を返した。

小さな桜は、もう少しで花を咲かせる。

愛らしい花弁が煌めく頃、私とミオンはこの世界と離れることを約束する。

今や全てが朧で不確かだ。眠くて仕方ない。

もうすぐ、私とミオンの為に植えられた桜が咲く。

私は今、とても満ち足りた、幸せな気分の中にいる。

この世界の、全てを愛おしいと思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7118b/>

ミオン

2010年12月28日14時28分発行